

稲吟OB会会報

早稲田大学稲吟会創立 55 周年記念号

～稲吟～



早稲田に生まれて 55 年
早稲田大学稲吟 OB 会

目次

稲吟 OB 会会長挨拶	2
早稲田大学稲吟 OB 会会長 大竹茂行	
現役挨拶	3
早稲田大学稲吟会第 55 代執行部幹事長 加賀美慧	
早稲田大学稲吟会第 55 代執行部副幹事長 愛甲麻友	
早稲田大学稲吟会創立 55 周年記念大会報告 その 1	4
記念吟詠発表大会	
会員の皆様から その 1	9
55 周年記念大会に参加して	
昭和 35 年卒 石上俊夫	
早稲田大学稲吟会 55 周年に寄せて	
昭和 38 年卒 藤澤孝好	
稲吟会の思い出	
昭和 40 年卒 野中民蔵	
55 周年・「稲吟」第七号とともに	
昭和 41 年卒 松岡宣夫	
須田さん	
早稲田を揺るがした 150 日	
昭和 43 年卒 大西昭宏	
早稲田大学稲吟会創立 55 周年記念大会祝賀会と荻島君について	
昭和 54 年卒 高畑慎二	
早稲田との、そして稲吟会との繋がり ～お二人からの手紙～	
昭和 54 年卒 荻島俊之、貴子 ご夫妻	
早稲田大学稲吟会創立 55 周年記念大会報告 その 2	18
記念祝賀会	
会員の皆様から その 2	33
55 周年に寄せて ～ 5 10 15 20 25 30 ～	
平成元年卒 山田仁史	
花は桜木、男は日本男児	
平成 3 年卒 星野美和子	
大人のサークル活動	
平成 4 年卒 高橋 優	
稲吟会と私	
平成 19 年卒 菊地美名	
編集後記	
記念写真	38

稲吟 OB 会 会長挨拶

皆様一人ひとりの情熱による 55 周年

～60 周年に向けて盛り上がっていきましょう！～

早稲田大学稲吟 OB 会会長
大竹茂行

季節外れの台風接近という悪天候の中、早稲田大学稲吟会創立 55 周年記念発表大会および記念祝賀会は百余名という多くの方々のご参加を賜り、滞りなく行われました。大会と祝賀会の会場が離れていたこともあり、実行側としては当日、交通機関の乱れが出ないか大変気を揉んでおりましたが大きな影響もなく、祝賀会が終わるころには風雨も収まり、胸を撫で下ろしました。至らぬ点等、多々あったこととは思いますが、私自身はまずは無事に終えることができ、肩の荷が降りた思いです。

さて、今回、無事に 55 周年を終えることが出来たのは関係各位のご指導、御支援の賜物であることは言うまでもありませんが、それとともに、OB 会の皆様一人ひとりの情熱があつてのことだと感じております。皆様からお寄せいただくご意見、ご要望は時には耳の痛いこともありましたが、稲吟会、そして OB 会を大事に思う気持ち、そして、より良くしようという思いからのことであり、私どもとしては大変貴重なものでありました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

50 周年から 55 周年までの間、現役会員の激減などの危機もありましたが、現役と OB が一体となってこの危機をひとまず乗り越えることができたと思っております。60 周年までの 5 年間で、どんなことが起こるのか想像もつきませんが、皆様と一緒に乗り越え、そしてここまで脈々と受け継いできたバトンを、次なる節目に着実に渡していきたいと思っております。最後にもう一度、本当にありがとうございました。そして 60 周年、70 周年、100 周年に向けて、ともに稲吟会と OB 会を盛り上げていきましょう。



現役挨拶

創立 55 周年記念大会を終えて

第 55 代執行部幹事長 加賀美慧

稲吟会は今年で創立 55 周年をむかえ、めでたく周年大会を開催することができました。大会には、会長の石堂常世先生、大川吾風先生、友情校として明治大学詩吟研究部、関西大学吟詩部、そして大勢の OB・OG の先輩方をむかえ盛大な発表会となりました。

今大会に参加した現役会員は、一年 3 人、二年 3 人、三年 2 人、四年 4 人の計 12 人です。12 人という人数のなかで、会員全員が発表会にむけて真剣に取り組む協力しあえたからこそ、大会を無事終えることができたと思っています。なにか、いかにもなことを書いておりますが、とても感謝しています。

さて今回の構成吟は、「八百屋お七」でした。脚本は二年生が作り、夏合宿で初めて演じました。というより恥ずかしがる一年生に演じていただきました。お七役は平山真生さん、吉三郎役は木嶋孝幸くんでした。初めは動揺があったものの、10 月中に多量の練習を積み、いざ大会本番ではふたりとも素晴らしい演技をみせてくれました。特にお七の高笑い(火つけのシーン)の熱演っぷりには客席でビックリなされた方も多かったと思います。

最終部では OB・OG の先輩方にご登壇いただいて「富士山」を大合吟いたしました。60 人を超える人数での大合吟は現役みな初めての経験で、その迫力に圧倒されました。天を抜くかのような吟声と稲吟会の底力、たくましさを感じ、吟じつつ深く感動いたしました。

祝賀会での盛り上がりはなお凄まじく、新宿節、人生劇場の大合唱は圧巻。全早稲田を稲吟会一色で埋め尽くす勢いでした。このように OB・OG・現役が揃い、放歌高吟できるサークルが他にあるでしょうか？稲吟会の偉大さを再認識いたします。

55 周年大会、祝賀会を通じ、われわれ現役会員は改めて稲吟会の培ってきた歴史、絆を肌身に沁みて感じました。そしてその歴史の最先端に私たち現役がいるのだと考えると、なんだか元気が湧いてきます。稲吟会はまだまだ吟じ足りません。これから先 10 年 100 年先も、ずっと吟じるのだ！！



55 周年記念大会を終えて

第 55 代執行部副幹事長
兼 渉外幹事 愛甲麻友

私は第 55 代執行部副幹事長、渉外幹事として今回の記念大会を迎えることとなりました。執行部の一員として節目の年に相応しい記念大会になるよう頑張りたいと思う一方、会員全体の人数が少なく、3 年生は加賀美幹事長と今年度入会した方だけという状況でうまく記念大会を迎えられるか心配でした。昨年は自分のことで手いっぱい運営にほとんどかわっていませんでした。しかし 4 年生や OB・OG の先輩方、友好サークルの方々など大変多くの人にご協力いただいて、なんとか無事に終えることが出来ました。感謝の気持ちでいっぱいです。直接ご助力頂いただけでなく、今までの発表大会の資料などを通じて間接的にも先輩方のお力をお借りしました。さまざまな資料・記録を拝見して 55 年という先輩方が積み重ね



てきたものを改めて実感しました。この区切りの年に執行部として参加することが出来てとても勉強になりましたし、いい思い出になってよかったです。祝賀会でもたくさんの先輩方に声をかけていただいて、本当に温かくいいサークルだと思いました。

このあと稲吟会が 60 年 70 年と続いていけるように、先輩方から受け継いだものを少しでも多く後輩に伝えていって更なる発展につなげてもらえればと思っています。来年は人数も増やしていきたいところです。OB・OG の先輩方、今後とも稲吟会・現役をよろしくお願い致します。

創立 55 周年記念大会報告 その 1

記念吟詠発表大会/記念祝賀会

共催： 早稲田大学稲吟会
早稲田大学稲吟 OB 会

大会委員長

大竹茂行（早稲田大学稲吟 OB 会会長 H3 卒）
加賀美慧（早稲田大学稲吟会第 55 代執行部幹事長）

大会実行委員

松村哲郎（S48 卒） 菅原 均（H4 卒） 田口勝徳（H6 卒） 片山 俊（H18 卒）
愛甲麻友（2 年 副幹事長） 紺谷弘毅（2 年 副幹事長）

日時：2010（平成 22）年 10 月 30 日（土）

記念吟詠発表大会：

小松川区民館 2 階ホール 12：30～16：00

〒132-0035 江戸川区平井 4 丁目 1 番 1 号 TEL03-3683-5249

記念祝賀会：

大隈ガーデンハウス カフェテリア（大隈庭園内）
18：00～20：30

水府流吟道様より宗範 大川吾風先生を始め 4 人の先生方、稲吟会会長 石堂常世先生、現役 12 人、現役側招待客 9 人、OB 会員とご家族 80 人の総勢 106 名の参加の下、55 周年記念大会が開催されました。次項より、当日の写真を掲載し大会当日の報告をさせて戴きます。

記念吟詠発表大会

台風の風雨の中、OB 会員とご家族 55 人に参加戴きました。

プログラム

開会宣言

第一部 剣舞・独吟・男子合吟

第二部 記念式典

第三部 剣扇舞・独吟・女子合吟

第四部 学生企画 構成吟

第五部 現役全合吟

OB・現役全合吟「富士山」

早稲田大学校歌 閉会宣言



記念発表大会の会場、「江戸川区小松川区民館」

第一部

剣舞・独吟・男子合吟

剣扇舞「金州城」(吟) 紺谷弘毅 (舞) 愛甲麻友・加藤白峰
扇舞「富士山」(吟) 加賀美慧 (舞) 平山真生・安武美童
独吟「決別」 木嶋孝幸
男子合吟「本能寺」 男子全員



第二部

記念式典

挨拶 祝辞 友情校吟詠 師範吟詠



稲吟会会長 石堂常世先生



早稲田大学稲吟 OB 会会長 大竹茂行



第 55 代執行部幹事長 加賀美慧



水府流吟道宗範 大川吾風先生

第三部

剣扇舞・独吟・女子合吟

扇舞「川中島」(吟) 愛甲麻友 (舞) 加賀美慧
独吟「垓下の歌」(吟) 平山真生
剣舞「爾霊山」(吟) 加賀美慧 (舞) 木嶋孝幸
女子合吟「静御前」 女子全員



第四部

構成吟

独吟「結婚式」(吟) 大田和弥
扇舞「江南の春」(吟) 愛甲麻友
(舞) 菅谷沙織・滝本めぐみ
独吟「貧交行」(吟) 加藤白峰





第五部

現役全合吟 早稲田大学稲吟会 会詩「書懷」

OB・現役全合吟「富士山」

早稲田大学校歌斉唱



会員の方々から その 1

55 周年記念大会に参加して

昭和 35 年卒 石上俊夫

「今日の出席者の中では、僕たちが最長老のようだ」という同期の友の声を聞きながら、本当に久しぶりの稲吟会の催しに参加する喜びを感じていた。

昭和 31 年入学と同時に、漢詩を好んだこと、生来の悪声を直したいと入会した。50 余年前の靄の中に浮ぶ思い出は、幼稚園の教室で伊藤海風先生に教えて頂いた練習風景である。一握の人達は听に上手に吟じていたが、蛮声をあげてうなる初心者が多かった。時には近くの甘泉苑で吟じたこともあった。池の対岸の茂みの中から雄弁会の叫びが流れていた。大隈小講堂の発表会では、緊張して次々となれない壇上から各自得意とする漢詩を吟じた。

はじめて参加した合宿は猪苗代湖畔の旧官家の別邸だった。参加した 10 人は学生前期の若さで高揚した気分に溢れ、楽しい時間を過ごした。練習は勿論、同宿した地元福島からの純朴そうなお嬢さんグループとの交流もなつかしい。

庭先での豪快なキャンプファイヤー、裏磐梯の景観と良い旅でもあった。

今回の大会で驚いたことは 2 つある。1 は女性の数が多いこと、2 は学生の吟詠の質の高さである。自分達の学生の頃と比べるせいかそう思う。この時季こんなに詩吟の若い愛好者がいるのは頼もしい思いです。一層の発展を祈ります。

高齢になった今、健康のためにカラオケをやるべしというが、吟の効果はもっとあるのではないか、見直したい。

自分の病、家内の死去とが会の節目に問わるく当たりご無沙汰しており、彼奴何時の間にか消えてしまったでは、まずいと思っており、今回の幹事のご配慮により参加できて、宿題を済ましたようなスッキリした気分です。それにつけても、詩吟との縁は強いんだと感じてうれしく思っております。ありがとうございました。



早稲田大学稲吟会 55 周年に寄せて

昭和 38 年卒 藤澤孝好

1. 創立 55 周年記念大会出席

2010 年 10 月 30 日雨の午前 6 時に愛知県岡崎市の自宅を出発、午前 11 時 30 分に会場の小松川区民館に到着。35 年卒の金子先輩・38 年卒の酒井君と一緒に、開演から終演まで静聴させていただきました。会員は 11 名と少なめでしたが水府流師範吟詠・友情校吟詠・構成吟と大変熱のこもった吟と舞でした。最後は定番の OB 在校生の大合吟富士山であり、健康で参加できたことの喜びを感じました。翌日は親子 5 人で早慶戦観戦。3 日は 50 年振りのリーグ決定戦優勝の美酒を味わいました。

2. 創立 5 周年当時の様子

私は昭和 34 年入学・38 年卒業です。入学早々入会し 4 年間お世話になりました。新入歓迎会は目白通の「神田川」と記憶しております。第 1 次花の時代の 35 年卒生が 3 年生でよく指導していただきました。課外授業の麻雀も指導いただきました。36 年卒の江口先輩・37 年卒の鈴木先輩の両幹事長が共に吟道・指導力に優れ、私共新入会員を熱心に指導し基礎をかためました。私共 38 年卒は名簿上は 13 名ですが、美村君・原田さん（詩舞専門）がいました。そして根岸堅太郎君（大阪）・矢次健治（九州）・私（中部）3 人の幹事長（当時は半期制）を搬出しました。更に中島久美子（江口陽也婦人）さんの超有名人が在籍しておりました。

(1) 会員数の増加

OB 会会員名簿に記載されている会員数は 39 年卒 14 名、40 年卒 10 名、41 年卒 15 名と毎年 10 名以上の新入会員を獲得し現役会員総数は 40－50 名と早稲田文連・関東詩吟連盟のなかでも大きなサークルに急成長し、人容と人材が充実しました。

(2) 文連加盟

文連加入は稲吟会創立当時の課題であったと聞いております。39 年卒の中塚勝君が文連幹事に就任し 2 年ほどの準備期間を経て申請手続きに入りました。書類審査合格後の面談審査には幹事長の私が 1 人で臨み、見事合格でき祝杯をあげました。文連加盟によりサークル活動の基盤が強化し、早稲田祭における大隈講堂・大隈小講堂の借用が容易になり大きなメリットを生じました。本当に嬉しかったです。中塚君他協力・応援していただいた人にはいまでも深く感謝しております。

(3) 会旗の完成

関東各大学との吟詠交歓会参加する機会が増え、稲吟会員にとってさみしかったのは早稲田大学稲吟会の会旗（縦長）がないことでした。同期の酒井健吉君が墨で書いた紙の会旗で代用しました。昭和 36 年秋稲吟 OB 会より寄贈を受け幹事長の私が受け取りに伺いました。紙製と比べ重厚な布製であり大変重たかったのを記憶しております。これで稲吟会の意気が盛り上がり、会旗は吟詠大会・新入会員勧誘・夏合宿で大活躍することになりました。今般、改めて仰ぎ、酒井君と記念写真を撮りました。

(4) 吟詠交歓会の開催

関東各大学との吟詠交歓会が江口幹事長時代より開催されておりました。早明交歓会に何度も出かけました。他校を訪問して交換することに興味・意義・重要性を感じ、第 1 回早慶交歓会・第 1 回早国交歓会を開催したことが思い出に残っております。

(5) 関東大会・全国大会開催

当時の稲吟会にとって最大の念願は関東詩吟連盟大会と全国詩吟連盟大会の開催でした。34 年度幹事長の江口陽也先輩の頃より準備が進められ、渉外幹事酒井君が引継ぎ努力して誘致に成功。特に全国大会の誘致には酒井君・私・後輩の椋本君等が自費にて 36 年開催の関西大学に赴き、次回開催権を獲得しました。36 年に関東大会・37 年に後輩の椋本幹事長が全国大会を開催しました。今般の記念大会に関西大学（創部 57 年と聞きました）より友情出吟（主将・女子）があり、感謝と因縁を感じました。

(6) 第 1 回合同ハイキングの開催

同期の内田信男君（故人）が中心となって女子大学との第 1 回合ハイキングが開催されました。相手校は文京区大塚の跡見女子大学でした。「当方美人多し」との内田君の勧誘言葉に誘われ、多数の参加者もありました。後日談も発生したようです。

3. 先輩・同期との出会い

4 年間の稲吟会時代に多数の人との出会いがありました。稲吟会関係で思い出深い 3 人について記しておきます。

(1) 伊藤周作先輩宅訪問

昭和 36 年度後期幹事長に就任早々、新宿区若松町の自宅を訪問し面談してまいりました。面談の内容は 3 つ。1 は稲吟会設立の思い出一初代師範伊藤海風先生との出会いによる設立したものであり、今後の発展を期待している。2 は稲吟 OB 会を設立する機運が高まり、設立趣意書を作成したので、OB 各位に配布し設立に協力してほしい。3 はこちらより会旗がなくさみしい、他校に負けない大きさの会旗がほしい旨を申し出ました。

(2) 小淵恵三先輩との出会い

昭和 36 年秋、小淵先輩が稲吟会に入会しました。大学院生で雄弁会に所属、政治家希望、声も大きく、太く、体型も大きく指導幹事がもてあまし、幹事長の私に指導依頼があり、勇気をだして吟指導にあたりました。性格は温厚で助かりました。先輩が内閣総理大臣に就任した翌年、1999 年年頭挨拶を NHK でみて、おもいきって年賀状をだしましたところ A4 サイズの年賀状返信をいただきました。これも稲吟会とのご縁を感じました。将来、稲吟会より 2 人目の内閣総理大臣を期待します。

(3) 田嶋昇君との出会い

田嶋君は私と同期です。彼は剣舞が得意で稲吟会で貴重な人材でした。ある大会で私が吟者、彼が剣士にて爾霊山を演じましたところ中間にて私が語句を忘れてしまい大変な迷惑をかけてしまいました。現役時代のホロ苦い思い出です。早稲田精神昂揚会にも所属していた彼からアメリカ大陸徒歩横断を勧誘されましたが、お金と就職活動を理由に断りました。1963 年田嶋君を団長とする早大生 5 人は 6 千キロの徒歩横断に見事成功しました。そして隊員の 1 人大西七郎



君が「日本ウォーキング協会（JWA）」を設立しました。JWA は 2004 年 6 月「協会設立 40 周年記念式典」（新宿・京王プラザホテル）において 5 人を表彰しました。私は 55 歳よりウォーキングを開始、2000 年 10 月「岡崎市ウォーキング協会（OWA）」を立ち上げ、会員数 300 人以上に成長させました。記念式典に OWA 会長として出席し、田嶋君と再会し詳細を聞き若き日の勇気に感嘆いたしました。

追記 私は昭和 38 年に金融機関に就職し、企業戦士として活躍してきました。最大の思い出は勤務先企業の株式上場を 5 つ成功させたことです。名証 2・1 部、東証 2・1 部、ロンドン市場です。これも稲吟会に在籍したお陰と深く感謝しております。結婚後（女子のみ）4 人の子供ができ責任を負う人生になりましたが、4 人共 4 年生大学を卒業でき、結婚もでき、孫も 5 人（男 4 女 1）となりました。孫の配偶者 4 人のうち 2 人が早稲田の後輩であり、早稲田とのご縁が深くなりました。ラッキーです。

稲吟会の思い出

稲吟 OB 会顧問 昭和 40 年卒 野中民蔵

この原稿を（早慶戦）が終わり、早稲田の優勝のニュースを聞いた後で書いています。

私が早稲田に入学した年はあの歴史に残る（早慶 6 連戦）で早稲田が劇的な優勝を成し遂げた翌年です。1 年浪人しましたので、自宅のテレビで切齒扼腕して見ていたのを昨日のように思い出します。念願の早稲田入学が決まり、マンモス大学で自分を見失わないように何かのサークル活動に入ろうと思っていました。余り豊かでない家庭でしたので、お金の掛からない、しかも、社会に出て役に立つ（？）サークルを考えていましたところ、（詩吟部）からの勧誘があり、飛び込みました。一年の頃は声も出ず、苦勞しましたが、合宿（天童）が終わった頃には何とか声も出るようになり、少し自信が付きしました。この合宿が私を稲吟会の虜にしてくれました。一つは堅いイメージとは違い、大変家族的なサークルだった事、又、関西出身の先輩が何人かおられた事。これは楽しく過ごせるなと安心し、続けて行こうと自分なりに納得。

2 年生になり、部活動の資金繰りの話が大きな話題になり、当時どのサークルも（ダンスパーティー）を盛んに開き、部資金を捻出していましたので、我が（稲吟会）もパーティーをして、資金を稼いだらどうかと提案したところ、お前が責任者になれと幹事長から言われ、鈴木三郎君（故人）を補佐に頼み、見事成功を収め、その収益金で（会旗）を買い、面目躍如。今もその旗は現役で活躍中。その後毎年パーティーを開いたお陰で（稲吟会）の財政が豊かになり、些かの貢献が出来たのではないのでしょうか。4 年生の時「関東支部委員長」になり、この経験を生かし、支部何周年記念の「音楽祭」を銘打ち、稼いだ資金を当時九州支部創立記念に寄付した事を思い出します。

このように私の（稲吟会）の思い出は詩吟の練習より、資金繰りの支援活動の方に重きを置いた活動のような気がします。が、楽しい思い出がまだまだありますが、紙面の都合で余り書けません。只、私にとり、（稲吟会）はこれまでの人生の中で、「心の故郷」のコアです。これからも（稲吟会）が何時までも継続する事を願ってやみません。



55 周年・「稲吟」第七号とともに

稲吟 OB 会顧問 昭和 41 年卒 松岡宣夫

この度の 55 周年記念吟詠発表大会・同祝賀会につきましては、現役および OB 会執行部皆様方によるご尽力のおかげで立派に開催されましたこと、誠に喜ばしく心からお礼申し上げます。特に発表大会では、現役諸君の真面目に意欲を持って練習された成果が溢れ出ており、観る者に学生らしい清々しさと感動を与えたものと確信します。ありがとうございました。

さて、手元に「稲吟」第七号があります。古色蒼然、各頁ともセピア色に退色して表紙の元の色も定かではありません。ここに巻頭言として、稲吟会発足当初から会長を勤めていただいた植田先生の「稲吟会十周年を祝して」という次の歌があります。

たからかに歌へ わかうど
 あたらしき世界をひらく曙の空
 たどりゆく道は はるかに
 もろびとのこゝろにひびけ
 われらの歌は

この号、前田先輩、安若兄の文面によると稲吟会誕生のきっかけが銭湯における有志の邂逅であり、発足は昭和 31 年 10 月、場所はうなぎ専門料理の料亭「神田川」とあります。今前田先輩に伺うと、甘泉園近くの質屋の隣りにあった銭湯でそういうことがあったにちがいない、吟詠会（昭和 34 年稲吟会に改称）設立の呼びかけは伊藤周作先輩の“ピラ”だったそうです（発会式は正確には昭和 31 年 9 月 24 日）。

爾来 55 年、周年記念大会をめでたく迎えた現在、“集まり散じて人は変われど 仰ぐは同じき 詩吟のころ”の旗下、紆余曲折を経ながらも在籍する会員の努力と OB の協力によって稲吟会が未来に向かって永続することを疑いません。

創立十周年当時私は現役 4 年生でした（昭和 37 年入学）。同期の卒会仲間は 15 名です。現役当時他に、旭、石川、立川、朴君等いましたが、どういう事情からか同期 OB とはなりません。間もなく 67 歳を迎えますが、“人生五十年”は昔の話とは言え、15 名の仲間から既に 3 名が彼の世に旅立ってしまいました。

古い「稲吟」のおかげで青年現役時の仲間たちとの悩み、気概を懐かしく思い起こすことが出来ました。生ある時、“もろびとのこゝろにひびくわれらの歌”を発信しなければと。60 周年記念大会を楽しみにしています。



55 周年そしてこれから

稲吟 OB 会顧問 昭和 42 年卒 須田芳矩

今年稲吟会創立 55 周年記念大会を迎え、そして無事に打ち上げました。現役諸君、僅か 10 数名であり乍ら立派な大会見事、そしてご苦労様でした。本当に嬉しい事です。

私が、今は昔 10 周年の幹事長です。早いもので、あれから 45 年たちました。永かった様な、否“あつという間”と云うのが正しいでしょう。

10 周年の大会は当時の文学部 181 号大教室でした。教室と云うより講堂のイメージのが、強く、そして大きな施設でした。実行委員長は 4 年の故鈴木三郎先輩でした。舞台は立派な大きな舞台で、舞台監督は、2



年先輩の前橋悟先輩が御努め下さいました。前橋先輩の御発案で照明を今大会では取り入れようとの事で早速取り入れる事となりました。当時の学生吟界では照明を取り入れている大学は皆無で、学生吟界初の快挙でした。しかし乍ら照明の経験者が部内は勿論、OB 諸兄にもいませんでした。そこで私の中学、高校が一緒に当時、早稲田大学文学部演劇科の友人 林秀樹君に相談致しました。彼は当時文学座の研究生（現文学部大幹部）でした。彼は快く引き受けてくれました。結果、照明効果抜群で大好評でした。

又、前橋先輩の発案で目玉として殺陣構成吟をやる事となりました。どうせやるなら迫力のある、よりリアルにとの事で当時殺陣で一番有名な「新国劇」に御願いする事としたのです。皆で新国劇の劇場に足を運び当時の名だたる先生方に御願いに上がりました。創始者沢田正二郎先生は早稲田ご出身で、はるか後輩の学生さん達の為ならと御受け戴きました。殺陣師の先生が、早稲田迄来て下さり、存分に稽古をつけて戴きました。それはそれは厳しい稽古で、怪我人続出でした。（もっとも私は殺陣のメンバーではなく無事でした。）これらの事が、大会会場にいた時、走馬灯の様に順次思い出されました。大会が成功したのも諸先輩方の御支援、御指導そして現役会員の頑張りが、あったればこそとの事でした。嬉しかったです。

一口に 55 年とは云いますが、実は大変な事なのです。一番大事な事は、その年、その年に現役の存在なしには有りえない事なのです。現役の在籍者なくしては、一年、一年はありえませんが、かつ又、現役なくしては、OB 会もこれ又存在しなくなるのです。即ち現役あつての OB 会なのです。OB 会の会員御一人、御一人の現役時代の御活躍そして日々の歩みが、あったればこそなのです。全員が、稲吟会 55 周年の立役者なのです。全員が歴史の一頁、一頁なのです。それ故、在籍しかつ卒業し、そして OB 会員となられた事を大いに誇りに思ってください。そして 60 年、70 年、100 年と続ける為に現役に対し愛情、そして、どのような形であれ御支援して戴き度く存じます。

私が OB 会会長在職中は、まず第一に、現役の存在があるなしでした。新入生が、如何に 4 年間在籍し、様々な経験と思い出を造り上げ、無事に卒業してくれる事、そして OB 会の会員となってくれる事でした。出来るだけ現役とコミュニケーションを取るべく、週一回の休みはほとんど毎週のように早稲田に行きました。本来の OB 会会長の姿としては多々異論が、あるとは存じておりました。しかし乍ら、あえて云います。現役にもっと愛、そして眼を向けて、何らかの接触を、それが、稲吟会の「これから」へと続くのです。

完

早稲田を揺るがした 150 日

昭和 43 年卒 大西昭宏

創立 55 周年記念大会に見た「稲吟会会旗」が、在学当時の鮮やかなエンジ色を失い、房の一つが失われている姿に この間見守ってきたであろう幾星霜に思いを馳せ感慨を禁じ得なかった。

卒業以来 42 年を過ぎた今学生時代の記憶が薄れゆくなかで今も尚鮮明によみがえるものがある。学生会館の管理運営権獲得と大幅な学費値上げ反対を掲げ 昭和 41 年（1966 年）1 月 18 日に始まった第 1 次早大闘争である。

21 日までに全学部がスト



に入り 以後 6 月、最後となった文学部のスト解除で決着を見る迄 バリケードによる全額封鎖、機動隊の導入によるバリケード解除、警察官への抗議集会・再占拠、203 名の逮捕者を出した 2 度目の機動隊導入、自主卒業式（3 月）、4 月スト再突入、大浜総長退陣（4 月）、阿部新総長就任、学生の大量処分、へと続いた激動の足かけ 7 ヶ月。所謂「早稲田を揺るがした 150 日」闘争で、キャンパス内は騒然とした雰囲気であった。

当時の稲吟会は 実働会員数 50 名前後を擁する文連（文化団体連盟）の有力メンバーの一つで 長期化した闘争のなかその動向が注目されたが 折しも選出された我々第 11 代執行部はスト続行の賛否に関し総員投票を実施、結果は奇しくも各々 20 数票で全くの同数となった。議長としての私は大いに迷ったが 議長としての 1 票の行使を放棄し 会としては統一行動を課することなく 各々の信条にそっての自主行動とすることに決した。この折の判断を巡り 未だに煩悶することがある。その後私は スト支持派の一員として闘争のなかに我が身をおいた。

早稲田のみならず現在の殆どの大学において学生は「社会問題」に興味を示していないといわれている。D・リスマンが「学生消費主義」となづけた大学生の「お客様意識」だ。社会情勢の変化に伴い価値観も変わっていることを否定するものではない。が、しかし、学生のみならず許され求められる特質は今も尚健在であろう。「らしき美しさ」とは私が中学時代の恩師から貰った言葉だ。失われた 20 年からくる現代の閉塞状況からいち早く脱皮することが 急進するグローバリゼーションのなかで鋭く求められる今 居心地の良さに安住することなく 閉塞感の打破にむけてのダイナミックなチャレンジが肝要であり その精神的中核は学生時代にこそ涵養して欲しいと願うや切である。敢えて言う。「アパシー（政治的無関心）になる無かれ」と。これは私が 44 年前、あの稲吟会総員投票の終わったあとに会誌に寄稿した文の主題である。 今尚 大切なことだと思っている。

早稲田大学稲吟会創立 55 周年記念大会祝賀会と荻島君について

昭和 54 年卒 高畑慎二

平成 22 年 10 月 30 日午後、季節はずれの台風が迫りくるなかで記念大会会場に向かう電車に乗っていた小生は「こんな大荒れの天気の中、果たして荻島は予定通り祝賀会に来られるのか。」とずっと考えていた・・・。

あらためて言うまでもないが、第 22 代幹事長・荻島俊之との交友は今から 35 年前の昭和 50 年春に遡る。早稲田大学に入学すべく滋賀の故郷から上京し他の同期よりやや遅れて稲吟会に入部した

私が彼と話らしい話を最初にしたのは早慶戦のコンパの時だったと記憶している。

その際彼は「早実高時代体をこわしたことがあって酒もあまり飲まないようにしている。」と話していたようにおとなしい真面目そうな青年というのが彼の第一印象であった。ところが、その後健康面は全く問題がなくなったのかいつの間にかお互い酒と歌（もちろん詩吟も）をこよなく愛する早稲田らしい（というか稲吟会らしい）人間になるに従って元々二人とも根が真面目な硬派であることが共通していたこともあって肝胆相照らす仲となり幹事長・副幹事長として支えあった。卒業後も、仕事・結婚等色々な面でいの一歩に相談・連絡し或いは支えあう仲は今でも変わっていない。

興銀リースの営業部長として昼夜奮闘していた彼がクモ膜下出血により自宅で倒れたと奥さまから電話があったのは今から 5 年前の平成 17 年 2 月。その年の秋に大々的に創立 50 周年記念大会が举行されたが、入院中のために本来喜びを分かち合うはずの彼がいない祝賀会はやはり寂しかった。

ところが 3 年前に自宅に戻り言葉は出なくても表情等でコミュニケーションを

とり 車椅子ながらも青森ねぶた祭りなど泊まりがけの旅行もできるほどの回復ぶりを見せる彼を見て、この 55 周年記念大会の祝賀会にはひょっとしたら参加できるのではないかと内心思っていたところ、奥さまからも同じ思い（それは即ち荻島本人の思い）であることを知ったのは 8 月の終わり。それを知った私はその矢先に行われた OB 会・現役による前夜祭の席上で会員諸兄に「荻島君が出席した時には大いに声をかけてやってほしい。また、何か手助けをお願いすることになるかもしれない。」と呼びかけたところ、多くの方々から「もちろんそうするので是非参加してもらいたい。」との声をいただいた。大会前には小生、菅原君（OB 会事務局長）そして奥さまがそれぞれに会場となる大隈ガーデンハウスの位置やバリアフリー状況を確認するための下見を済ませるなど出席のための準備を着々と行っていたところに、無情にも大会当日台風が関東を直撃するという一報。当日午前中にも奥さまから思案と心配をされているメールをいただき小生も決して無理はしない方がいいと思ったので電話でも話し合ったが、何と「本人は行く意思表示している。」というではないか。

そして祝賀会が始まるまで本当に来られるのかずっとヤキモキしていたが、ほぼ開始時刻の 18 時過ぎに会場に到着した荻島君の姿を見た時には安堵すると同時に涙が出るくらい嬉しかった。会場では本当に多くの方から声をかけていただいた。なかでも、やはり脳溢血を経験された前橋先輩と奥さまから「大丈夫。必ず歩けるようになるから。」と声をかけていただいたのは、荻島君と奥さまにとって一番の励ましになったのではないだろうか。

そんな暖かい雰囲気にも包まれるなか、現役に加賀美幹事長の発声のもと全員で荻島夫妻に校歌斉唱とエールのプレゼント。なんと荻島君本人が自ら右手を挙げたのには感動した。

荻島夫妻が閉会より 30 分ほど前に帰った後、多くの方から「荻島君（さん）、良かった。素晴らしかった。」との言葉をいただいた。きっとこの機会に荻島君と会えるのを心待ちにしてくださっていた方も多かったのだろうと思う。祝賀会は、荻島君も熱唱していた「人生劇場」や須田先輩の「新宿節」、再び校歌斉唱とエールで締めお開きとなったが、その声は自宅に戻った荻島君にも届ききっと一緒に熱唱してくれたのではないかなと思う。最後に OB 会諸兄・現役諸君、本当に有り難う御座いました。そして、荻島、本当に頑張ったな！嬉しいぞ。60 周年記念大会もきっと一緒に参加しようぜ！

早稲田との、そして稲吟会との繋がり

～お二人からの手紙～

昭和 54 年卒 荻島俊之、貴子 ご夫妻

重度のクモ膜下出血に倒れて 6 年目に入り、自宅での生活や週 3 日のデイサービスの生活にもすっかり慣れ、穏やかな毎日を過ごしています。

倒れてからこれまで、稲吟会の先輩をはじめ同期や後輩の皆様には大変ご心配をおかけしながらも、根気強く励まし続けて頂いた事は回復の強い力になっております。

青春の楽しい日々を共に過ごした友人や人生のいろいろな事を教えて下さった諸先輩の方々との絆を強く感じています。

先日の 55 周年記念大会では校歌と共にエールを送って頂きました。大変恐縮致しましたが、迫力ある素晴らしい歌声と皆様の温かさに主人と共に感無量になりました。

本人にとりましては、最高の応援歌であった事は間違いありません！これはたとえ医師であっても、家族であっても不可能な事で、思い切って出席して良かったと思いました。

ご出席の皆様、主人の為に貴重なお時間を本当にありがとうございました。

いつか又お会いする時には、より元気な姿でお目にかかりたいと思います。

今後も、早稲田との、そして稲吟会との繋がり主人の支えになっていくものと思います。どうぞよろしくお願い致します。



創立 55 周年記念大会報告 その 2 !!

記念祝賀会

於：大隈ガーデンハウス 10 月 30 日 18:00 開宴

大隈ガーデンハウス カフェテリア 2 階において、宗範 大川吾風先生を始め水府流吟道の先生方、現役側友情校・友好サークル、現役、OB 会員とそのご家族 およそ 100 名の皆さんと稲吟会の 55 年の歴史を祝いました。

当日の出来事

司会：松村哲郎副会長

開会の辞：大竹茂行会長
幹事長挨拶：加賀美慧幹事長
祝 辞：水府流吟道 宗範 大川吾風先生
乾杯挨拶：野中民蔵顧問
記念品贈呈：アリカ様 現役
祝電披露
近況報告 1：全国で活躍されている方々
現役紹介
校歌斉唱：荻島さんご夫妻と一緒に！
近況報告 2：全国で活躍されている方々
閉会の辞：小出秀文顧問
締め～人生劇場～新宿節～校歌斉唱

開宴前のひととき





開会の辞：大竹茂行会長

名司会：
松村哲郎副会長



いよいよ開宴



第 55 代執行部幹事長 加賀美慧君



祝辞：水府流吟道 宗範 大川吾風先生



乾杯の御発声：野中民蔵顧問

乾 杯





再 会







記念品贈呈 現役には旗棒、剣、コンダクター。

アリカさんには、感謝状と置時計を後日お贈りしました。



発表大会では今年も閉会宣言をしてくれた 4 年大田和弥君





全国でご活躍の皆さんから近況報告





現役紹介 記念発表大会お疲れ様！

今年作成の「新入生勧誘チラシ」を掲げる松村副会長
発表大会では、
元気な新入生の姿を見ることが出来ました。





昭和 54 年卒 荻島俊之, 貴子ご夫妻と校歌斉唱!そしてお二人に心からのエール!





また、お会いできるのを
楽しみにしています！



そして、しばし歓談のあと。。。。



1 番 50 周年の幹事長 平成 19 年卒 浅田俊祐君



2 番の口上 昭和 44 年卒 田尾秀寛さん

いよいよ佳境
『人生劇場』
いざ序幕



3 番 昭和 45 年卒 藤田和夫顧問



人劇の締め 4 番 平成元年卒 山田仁史さん





長年歌い継がれた『人劇』

そして



もちろん この方 昭和 42 年卒 須田芳矩顧問による

『新宿節』

須田さん日本一！！



校歌斉唱





現役にエールをおくる 平成 18 年卒片山俊君

閉会の辞 平成 48 年卒 前会長 小出秀文顧問





松村副会長より 55 周年記念大会実行委員のご紹介



最後に藤田顧問の音頭で、名司会 松村副会長に全員から拍手が贈られる



そして・・・夜はまだまだ、これから・・・

会員の方々から その2

55 周年に寄せて

～ 5 10 15 20 25 30 ～

平成元年卒 山田仁史

合宿の食事の際、下級生は「いただきます」の前に何か一言、おもしろいことを言わなくてはならない、というしきたりがあった。順番が回ってくる前は、吟の発表よりも緊張したが、今となっては楽しい思い出になっている。

振り返ると、他にも色々と不思議な「伝統行事」があった。

新入生が飲みつぶれるまで終わらない夜桜コンパとか、夏合宿のソフトボールの応援歌は替え歌の春歌とか、コンパで歌われる四歌や愛唱歌もそうした伝統に数えられるだろう。こうした行事がいつから稲吟会の伝統



として定着したのかわからないし、この中には既に失われていったものもあれば、私たちが卒業してから新しくできた伝統もあることだろう。

それでも、私にとっては私の体験したそれらの具体的な伝統行事の集合体が稲吟会の実体であり、そこを立脚点にして稲吟会の未来についても考えるしかない。

稲吟会が何度もあった存亡の危機を乗り越えて 55 周年を迎えられたということは、大変喜ばしいことだと感じている。その一方で、55 年間という時間の幅は、もはや一人の人間の身の丈の感覚では捉えきれないほどの長い時間だとも感じている。

そのことは OB 会がもはや共通体験を通じた暗黙の了解によって稲吟会像を共有することが困難であるという、新しい局面に入っていることを認識せざるを得ないということである。

私たちは稲吟会の継続性について「集まり散じて人は変われど、仰ぐは同じき理想の光」という言葉を好んで引用するが、実際には何を共有できているのか、そもそも何かを共有できているのかすら確信が持てないのではないかと考えている。

それでも、伝言ゲームのように世代が移るに従って細かな変性を繰り返して元の姿とはすっかり変わってしまったとしても、その中に何らかの共通のエッセンスのようなものを見出したいと望んでいるはずであり、そこが信じられなくなったとき、OB 会はいよいよ空洞化してしまうことになるだろう。

稲吟会の学生諸君には、先輩がやってきたことを守るのも、捨てるのも、その選択は常に諸君の手に委ねられていること、それ故にその選択のひとつひとつが歴史を作るのだということをしっかりと受け止めていただきたいと思います。

花は桜木、男は日本男児

平成 3 年卒 星野美和子

現在、某外資系企業に所属し英語と日本語の拙い語学力で日々仕事をこなしている。外資系企業といっても、本社はアジア圏なので、本社の人も英語を母国語としない。

英語は現在のエスペラント語（懐かしい。私が現役の頃は隣がエスペラント研究会でした。）といっても過言ではないが、生物の多様性がどんどん失われていくように、言語の多様性も失われて久しい。美しい我が母語、日本語の良さを再確認そして育むのにも「詩吟」というのは魅力的な媒体である、と近頃再認識いたしました。大学入学当時は三国志に傾倒していて、三国志研究会に入ろうと思っていたのだが、水戸先輩に吟詠集をみせてもらい「白亭城」があるのを発見して、興味を持ったのを今でもよく覚えている。まあもっとも、こちらを選んだのは、三国志研究会が「お茶会」のところ稲吟会は「飲み会」だったからなのだが。もっとも入部してからは、生来声がでかいだけの音痴なので、詩吟をたしなむまでにはなかなかいかず、苦労した思い出の方が多い。

詩吟は漢詩を朗ずるものが多いが、日本語に読み下すので、極めて日本的だと思っている。日本人は他国から入ってきた文化を自分たちなりに洗練されたものにするのに極めて得意な民族である。その表層だけをみると「模倣」と誤解されやすいが、内面はすでに日本特有の文化に洗練され変化しているのである、と思う。

だいたい漢詩は中国語だと韻を踏むが日本語ではそれは当然ない。でも耳に心地よく美しいと感じるから不思議だ。



明治神宮にて娘の七五三詣

そもそも、日本人は仕事好きなのであろうか、芸が細かいのである。着物好きが高じて和裁を勉強したことがある。縫い方が独特である。天衣無縫という言葉があるが、和裁は縫い目を見せないのである。そんな洗練された縫い方、諸外国にあるのだろうか？縫い方の上手い人は布目を傷つけず何度でもその布を再生利用するように縫えるそうである。

着物は何度も姿形を変えリサイクルされるのは有名な話だからご存知だと思うが、再利用の影にはミシン縫いではできない、縫い手の技が隠されているのである。

また、舞妓さんや七五三の稚児が頭にかざる、つまみかんざし（花かんざし）というのがあるが、あれはもともと余り布から作ったそうだ。パッチワーク以上の洗練された余り布使い。素晴らしい。ごみを出さない、リサイクル&エコ。

江戸の町は当時世界最大規模の都市でありながらもっともクリーンで安全な都市だったのは有名な話である。

日本のお国自慢は数々あれど、やはり行きつくのは「わびさび」、そして「もののあわれ」の精神

であろうか。散りゆく桜を愛でる精神は日本独自のものである。また八百姫、竹取物語、に代表されるように、永遠の命さえ尊ばない、独自の世界観が好きである。（この辺の話は平成元年卒の丸山先輩としたいですねー。次回の周年でお会いしましょう。）だから日本男児で好きな男は西行なのである。もののあわれがわかる男。彼の出家説は諸説あるが、時の中宮との恋が出家の一端だったという説がある、時の中宮と浮名を流すくらいの男なので、相当の色男だったに違いないと私は勝手に踏んでいる。

でも大和男児ではなく日本男児としたのは、武骨な一昔前の早稲田にも通じるような、東男が好きなのである。日本各地を旅するのが私の趣味の一つなのだが、狭い日本ではあれど、西と東では文化や自然（特に植生）が大きくことなる。突き詰めれば、狩猟採集民族を祖とする縄文と稲作文化の弥生とにいきつき、多分、両文化の間には壮絶な戦いがあったはず、そして蹂躪された縄文文化の方はあまり記録が残らなかったのだろうと想像しつつ、東を旅する。東男で好きな男の代表はもはや神だが、平将門である。

日本史上唯一無二、天皇となろうとした男。天皇なんて利用して自分が政治をおこなえばよいのである、西の文化を少しでも知っているならそうしたであろうに、なんて実直で武骨な男よ。中央から圧政を受けていた東の土着の民のために蜂起した（平家の内輪もめ説が有力だが、私は土着民の長だったという説をとっております）があえなく打ち首。しかし京都西条の河原でさらし首になった彼の首はここ関東まで飛んで帰るのである。そんな非科学的な伝説がいまだに語り継がれるほどの非凡な国士無双。

東では彼の信頼は絶大だったとみえて、江戸の総鎮守（神田明神）にもなっている程である。神田明神は神社にしては独特の雰囲気である。（もう一人の国賊、大国主の尊を祀っているので、独特の雰囲気にならない筈もないが）秋葉原が隣にあるからか、もともと土地がそうなのか、何か電氣的なテクノ的な独特の気がある神社である。今でも霊験あらたかで訪れる人が絶えない。もっとも詩吟好きなら、神田明神の近くにある孔子廟も併せて訪れることをおすすめする。神田明神と一転してうっそうとした森の中にある。（売店が空いていれば、漢詩の権威、石川忠久先生の色紙も入手できます。）

さて、とりとめのない私の文は、色気とは無縁そうな男の辞世の句でむりやり締めくりたい。

「旅に病んで、夢は枯野をかけめぐる」 by 芭蕉



大人のサークル活動

平成 4 年卒 高橋 優

55 周年という今回の大会は、私にとって 5 度目の記念大会でした。最初の記念大会は学生として、それ以降は OB として経験する大会でした。

初めての記念大会である 35 周年は学生としての参加でした。執行部の一員として OB の方々と準備・調整を進める過程では、先輩方の記念大会への思いに圧倒されることも少なくありませんでした。大会が近づくにつれて慌ただしくなる中、とにかく成功させるためにぎくしゃくと対応に走るような状態で、楽しい発表会にするというよりは、大過なく問題を処理することに追われていたように思います。



楽しむことができたのは、OB になってから関わった記念大会のほうでした。学生の頃と比べれば多少は周りが見えるようになり、問題解決のスキルも増し、できないこともどうすれば何とかできるかなるかなが分かるようになってくると、企画を実現していくことの楽しさは格段に大きくなります。学生の頃はただただ緊張しながらだった OB の先輩方や業者との折衝も、自分が社会人になれば相手のこともよく分かるようになりますから、多少は余裕も出てきます。しくじりもありましたが、失敗もまた酒の肴です。経験を持ったところで 50 周年という節目の大会の運営にタッチすることができたのは、幸運な巡り合わせでした。

こうした楽しみは記念大会ばかりではなく、通常の活動の中にもありました。特集を組んであれこれと原稿を依頼したり、体裁を自分好みにしたりと、好き勝手にした OB 会報。50 周年の記念大会に際して行った web サイトのリニューアルも、ドメインの取得やコンテンツ作りなど、新たなものを作り上げていく楽しみを持つことができました。

ただ、同じことを学生の時に任されていたら、面白がるころまでいけなかったのではないかと思います。その意味で、事務局での活動はまさに「サークル活動」であり、“Just for fun”の精神で取り組むことができました。本業のほうで忙しくなったこともあり、数年前に事務局からはお暇を頂戴することにしましたが、ぜひ多くの OB 会員の皆さんに「大人のサークル活動」を味わっていただきたいと思います。

今回の記念大会は、私にとっては一般会員として参加する初めてのものでした。企画の進行を気にすることなく（？）話し、飲み、そして酔っ払うのもまた楽しいものだの実感しました。最後に、このような楽しい大会を準備して下さった実行委員の皆さんに心から感謝いたします。

稲吟会と私

平成 19 年卒

菊地美名

仕事終わりに北九州空港から飛行機に飛び乗り、創立 55 周年記念大会に参加しました。私が指導幹事の職に就いていた 2005 年の 50 周年記念大会から早 5 年。時の流れの速さを感じます。

思い返してみると、当時は記念すべき節目の大会ということもあり、稲吟会に関わる皆の心に残る大会にしなければならない、というプレッシャーと戦い続ける日々でした。毎日の詩吟・舞の指導や練習に加えて、発表会や親睦会(という名目の飲み会)の企画に追われていました。毎週金曜日は決まって学館練後コンパがあり、その帰りには幹事長であった浅田君と大隈講堂前で朝まで語り合ったものです。稲吟会のこと、周年大会のこと、これからの人生のこと…話題に事欠くことはありませんでした。



諸先輩方・現役会員の多大なる協力を得て、50 周年記念大会・会活動ともに納得のいく運営を行うことができました。大会直後の大隈講堂前で、現役の会員達が幹事長を胴上げしている姿が今でも昨日のこのように思い出されます。

稲吟会を離れて 4 年経ちますが、サークルとは人と人の絆そのものであると強く感じます。苦楽を共にした仲間が、生涯の親友となっていく。長い時が過ぎた今でも久しぶりに会えば、あの頃のように笑いあえる。稲吟会は私に素晴らしい青春と親友を与えてくれました。創立 55 周年記念大会での後輩達の頑張りを見て、彼らの強い絆もまた垣間見えたような気がしました。これから先もこの素晴らしいサークルが続くよう、陰ながら見守っていきたいと思います。

編集後記

○55 周年実行委員会で「稲吟」の予算についての説明をした際、「・・・稲吟？」という空気。すでに「苗吟」は作成していない(知らない)とのこと。

実行委員会、事務局経験の方々にも意見を拝聴したが、本来現役が作るもので OB が強要すべきでない、PC・IT の発達した現代、自分の文章を活字にすることに、我々の現役時代ほど要望も少ないのでは、と。

○ちょっぴり寂しい思いをしながら、創立 55 周年記念号と銘打ち、記念大会の関連事業(大げさ?)として本号を発刊させて戴いた。

○当初、記念大会の写真集という位置づけで考えていたが、松村副会長にもお声をかけて戴き、大会終了後わずかの期間にもかかわらず、多くの方々からの寄稿を戴きました。本当に有り難う御座います。また、写真を提供してくれた、H21 年卒嘉部君、H4 年卒高橋どうも有り難う。自分の写っているのが少ない、無い、等々御座いましょうが、ご容赦ください。写真を撮ってくれていた、高橋の写真が最も少ないかも、です。

○記念号～稲吟～とさせて戴きました。今しばらく、「稲吟」は OB 会で預かろうかと思います。

平成 22 年 12 月 10 日 菅原 均
(H4 年卒 OB 会事務局)





発行：2010（平成 22）年 12 月 10 日
発行者：早稲田大学稲吟 OB 会事務局

編集発行責任者：菅原 均（稲吟 OB 会事務局）
早稲田大学稲吟会創立 55 周年記念号
～稲吟～